

寺田寅彦

錯覚数題



錯
覺
數
題

一 ハイデインガー・ブラツシ

目は物を見るためのものである。目がなければ外界の物は見えない。しかし目が二つあれば目で見えるはずのものがない。しかも見えるかと言うと、そうは行かない。眼前の物体の光学的影像がちゃんと網膜に映じていてもその物の存在を認めないことはある。これはだれでも普通に経験することである。たとえば机の上にある紙切りが見えないであたり近所を捜し回ることがある。手に持つ

ている品物をないないと言って騒ぐのは、漫画のヒーロー
ー「あわてもものの熊さん」ばかりではない。

留守にたずねて来た訪問客がだれだかよくわからない
場合に、取り次いだ女中に「鬚ひげがあつたか、なかつたか」
と聞いてみると、大概の場合に、はっきりした記憶がな
い。故長岡將軍くらいの程度ならばこういう認識不足は
ないであろうが。

知人の家の結婚披露の宴に出席する。宅うちへ帰って「お
嫁さんはきれいなかたでしたか」と聞かれれば「きれい
だったよ」と答える。およそ、きれいでない新婦などは

有り得ないのである。しかし、どんな式服を着ていたかと聞かれると、たった今見て来たばかりの花嫁の心像は忽然^{こっぜん}として灰色の幽霊のようにぼやけたものになってしまった。

「あなたの懐中時計の六時の所はどんな数字が書いてありますか」と聞いてみると、大概の人はちよつと小首をかしげて考え込んでしまう。実物を出して見ると、六時の所はちょうど秒針のダイヤルになっているのである。

こういう認識不足の場合はいいが、認識錯誤の場合にはいろいろの難儀な結果が生じる。盗難や詐欺にかかっ

た被害者の女師匠などが、加害者でもなんでもない赤の他人の立派なお役人を、どうでもそうだといい張る場合などがそれである。

突発した事件の目撃者から、その直後に聞き取ったいわゆる証言でも大半は間違っている。これは実験心理学者の証明するとおりである。そのいわゆる実見談が、もう一人の仲介者を通じて伝えられる時は、もう肝心の事実はほとんど蒸発してしまって、他のよけいなものやまるで反対のものなどが入り交じってしまっている。写真を撮るにとっても証拠にならぬ場合のある事はアムンゼンの飛

行機に行くえに関する間違いの例でも知られる。

新聞記事の間違いだらけな事はもちろん周知のことであるが、きのうの出来事さえ真実が伝わらぬとすればいわゆる史実と称するものもどこまで信用できるかわからない。ことによると九十パーセントが間違いかもしれない。

いつそのこと、全部間違いばかりと事がらぎまればかえって楽であるが、困ったことには時にほんとうなことが交じるので全部捨てるわけにゆかないから始末が悪いのである。

われわれの目も時々われわれをだますが、いつもだま
すと限らないで、時々は気まぐれにほんとうのものを見
せてくれるので困る。そうでなければ目などはないほう
がたしかに利口になれるであろう。

ハイデインガー・ブラツシと称するものがある。偏光
を生じるニコルのプリズムを通して白壁か白雲の面を見
ると、妙なぼんやりしたいちまつ一抹の斑点が見える。すすけた
黄褐色おうかつしよくの千切り形ちきあるいは分銅形がたをしたものの、両端
にぼんやり青みがかった雲のようなものが見える。ニコ
ルを回転すると、それにつれて、この斑点もぐるぐる回

る。自分も学生時代にこれに関する記事を読んでさっそ
く実験してみたが、なかなか見えない。そのうちに、ニ
コルをやけに急激にねじ回していると、なんだか、時々
ぱっぱっと動くものがあるような気がするので、それに
注意を集注して見ると、なるほど、ちゃんと書物に記載
してあると同じようなものが見える。いや、見えていた
のである。一度気がついてみると、どうしてこんな明白
なものが、今まで見えないでいたか、ほとんど不可解に
思われるほどにそれほどに明瞭に見えるのである。そう
なると、今度は、別の目的でニコルをのぞく時にでも、

これがあまりによく見え過ぎて目的とする他の光象を観察する邪魔になるのである。故野口英世博士が狂人の脳髓の中からスピロヘータを検出したときにも、二百個のプレパラートを順々に見て行って百九十何番目かで始めてその存在を認め、それから見直してみると、前に素通りした幾つもの標本にもちやんと同じもののあるのが見つかった。

ハイディングガーがこの現象を発見してまもなく、ヘルムホルツがこれをたしかめようと思つて実験したがどうしても見えなかつた。それから十二年後になつて、ある

日ひよいとニコルをのぞいて見たらただの一ぺんでこれが見つかつたそうである。人により、時によりこれの見え方に異同のあるのも事実らしい。

これは眼底網膜の一部が偏光で照らされた時に生じる主観的生理的現象である。「幽霊」などと似たところもあるが、それよりはもう少し普遍的な存在である。

これとは全く縁のないことではあるが、時代思想の「かたより光線」で照らされた多数の人の心の目にきわめてはつきり見える主観的生理的影像が、為政者や教育者の目に見えないことがあると、いろいろな重大な騒ぎが起

こつたりする。昔からの思想争闘弾圧史はみんなそれから来ている。ある時はまたXの方向に振動する偏光を見ている一派と、Yの方向に振動する偏光を見ている他の一派とがけんかをする。言う事が直角だけちがう。しかし、ちよつとニコルを回してみれば敵の言いぶんは了解されよう。かたよらぬ自然光で照らせば妙なブラツシの幽霊などは忽然と消滅するであろう。「心境の変化」で左翼が右翼にまた右翼が左翼に「転向」するのも、畢竟は思想のニコルが直角だけ回つたようなものかもしれない。使徒ポールの改宗なども同様な例であろう。耶蘇やその

幽霊に会ってニコルが回ったのである。しかしどちらへ曲げても結局偏光は偏光である。すべての人間が偏光ばかりで物を見ないで、かたよらぬ自然光でも物を見るよな時代がもし来れば、あらゆるデマゴグは腕をふるう機会を失うであろう。

二 つるばらと団扇とリベラリスト

鉢植^{はちう}えのつるばらがはやると見えて至るところの花屋の店に出ている。それが、どれもこれも申し合わせたよ

うにいわゆる「懸崖作り」けんがいづくに仕立てたものばかりである。同じ懸崖にしても、少しはなんとかちがった格好をしたのがあってもよさそうに思われるが、どれを見てもまるで鑄型に入れたようなもので、ばらの枝がみんな窮屈そうな顔をしてからみ合っているのである。こんなにはやらない前の懸崖作りはもう少しリベラリスティックな枝ぶりを見せていたようである。

来客用の団扇うちわを買おうと思って、あちこち物色してみても気のついたことは、われらの昔ふうの団扇の概念に適合するようなものがほとんど影をかくしたことである。

丸竹の柄えの節の上のほうを細かく裂いて、それを両側から平面に押し広げてその上に紙をはり、その紙は日月の部分ぶぶんしよく蝕のような形にして、手もとに近いほうの割り竹を透かした、そういうものが、少なくともわれわれの子供時代からの団扇うちわの定義のようなもので、それ以外のものは言わば変種のようなものであった。こういう昔の型には、研究してみたらおそらくいろいろな物理学的の長所があるだろうと思われる。このほうが風を生ずる点で、エフェイスエンシー効率がいいという説もあるがこれは研究してみないとわからない。しかししな撓いぐあいはたしかにこのほうが

柔らかかで、ぎごちなくないように思われる。これに反して木製の柄えで割り竹を無理にしめつけたのは、なんとなく手ごたえが片意地で、柄の付け根で首がちぎれやすい。

そんな理屈はどうでもよいとして、こうまでも「流行」という、えたいの知れぬ人工的非科学的な因子が、送風器械としては本来科学的であるべき器具の設計に影響を及ぼすものかと驚かれるくらいである。しかし、考えてみると、団扇や扇のようなものは元来どこまでが実用品で、どこまでが玩がんろうひん弄品であるか、それはわからない。玩弄品としては、年々目先が変わって、それで早くこわれ

てしまうほうがいいに違いない。

ただ困るのは、資本家でもなく、民衆でもなく、流行にかまわぬ趣味上のリベラリストだけであろう。しかし、机の引き出しを引っぱればあくものと思っっているのが錯覚であるように、自分のほしいものが市場にあるはずだと思ふのはやはりはなはだしい錯覚であるに相違ない。

三 捜すものは無い

捜さない時には、邪魔なほどに目の前にころがって

るものが、いざ入用となつて捜すときはなかなか見つからない。こういう気のする人は少なくないであろう。

そういう特別な場合の記憶だけが残存蓄積するせいもあるろう。捜してすぐにあつた場合は忘れるからである。

しかし、また、実際、特別緊急な捜しものをする場合には、心にこだわりがあつて、自由な観察と認識の能力がいくぶん減退しているためもたしかにいくぶんかはあ
るらしい。

これとはまた少し趣のちがつた「捜すものは無い」場合がある。

大きな書店の陳列棚をひやかしていると、実にたくさんの本がある。俳句の本、山登りの本、唯物論的弁証法の本、ゴルフの本、なんでも無いものはないように見える。ところが、何かしらある些ささい細な題目についてやや確実詳細な具体的知識を得たいと思つて参考書を探すとなつてみると、さて、なかなか容易に自分の要求に適應する本は見つからないものである。

たとえば、ばらの葉につくチューレンジ蜂ばちの幼虫を駆除するに最も簡易で有効な方法を知りたいと思つて、いろいろな本を物色してみたが、なるほど、多くの本には

これに関する簡単な記載はあるが、書き方がたいいていきわめて概念的で、本を読んだだけで、具体的に正確に直ちに実行に移しうるものはほとんど見つからなかった。たとえば亜砒酸鉛あひさんえんを使用すればいいが、劇毒であるから注意を要するとあるが、その注意のしかたは一言も書いてないから、この記事を読んだだけではちよつと物知りになるだけで実行できない。それで本のほうは断念して、園芸好きのR研究所の門衛U君に教わって理研製殺虫剤ネオトンのやや濃度の大きい溶液で目的を達せられることを知った。園芸書の著者になってみると、何々会社製

の何剤がいいなどと明白に書くのは何かいけないさしつかえがあると見える。ラジオ放送と似た禁令があるかもしれないが、読者の要求に対しては不親切であると思われる。

墨の製法を書いた本はないかと思つて氣をつけて見たが、なかなか見つからない。化学的染料塗料色素等に関する著書はすいぶんたくさんにあるが、古来のシナ墨、それは現在でもまだかなりに実用に供されているあの墨の詳しい製法を書いたものは容易に見つからない。昔の随筆物なども物色してみたし、古書展覧会などもあさつ

て歩いたがやっぱり自分の目的に適合するものは無い。ところが、自分の研究所のW君のにいさんが奈良県の技師をしておられるというので、これに依頼して、本場の奈良で詮議せんぎしてもらったら、さっそく松井元泰編げんたい「古梅園こばいえん墨談」という本を見つけて送ってくれたので、始めてだいたいの具体的知識に有りついた。なお後にこのほかに松井元惇げんじゆんの「梅園日記」というもののある事をも知った。ともかくこれで製造法のまねぐらいはできるようになった。自分の最初の捜し方が拙であったことはたしかであるが、それにしても、本屋に並んでいる書物が「類

型的」であり「非独創的」であり、「懸崖けんがいづく作りのつるばら」のようなものであるという例証にはなるかと思う。もう少し専門学術的な書物になると、特にドイツなどには実にいろいろの特殊問題に対して、それぞれ便利な書物ができているのに驚くことがある。それにしても、題目の種類によっては、少なくとも日本の本屋で捜そうとするとなかなか容易に見つかからぬこともしばしばである。

以前に「鳥類の嗅覚」に関する詳しい記事のありそうな本を捜していた時に、某書店の店員が親切にカタログをあさってともかくも役に立ちそうな五六種の書名を見

つけてくれて、「海外注文」を出してもらったが、一年以上たってもただ一冊手に入っただけで、残りのものは梨なしのつぶてである。

このごろでは「夜光虫ノクチルカ」その他の発光動物に関するものを搜しているが、まとまった手ごろな本はまだ見つからない。おかしいことには自身の搜さないの
ではずいぶん特殊な狭い題目の本が有り過ぎるほどある
ような気がするのである。

同じことを書いた本が幾種類もあるより、まだ本にな
っていないことを書いた本が一つでも多く出たほうが読

者には便利であるが、著者ならびに出版者にとっては、やはり類型主義のほうが便利であると見える。書物でも、やはりヨーヨーのようなものである。

話はちがうが、せんだって日比谷で「花壇展覧会」というものがあつた。いろいろのばらがあつた中に、柱作りの紅ひこうしよくばらのみごとなのが数株並んでいた。燃えるような緋紅色の花と紫がかつた花とおもしろく入り交じつて愉快的な見ものであつた。なんという名のばらか知りた
いと思つたが、現場には、品種名の建て札もなく、まただれの出品かもわからなかつた。数日後にまた日比谷で

「ばらの展覧会」が開かれたので出かけて行って、行き当たりばったりで会の係りの人に先日の柱作りの品種を聞いてみたがわからない。そのうちに、あれはたしか横浜のS商会の出品だったから、あちらの同商会の出張所で聞いてみたらいいだろうと教えてくれる人があった。それでさっそくそのS商会の陳列所へ行くと、係りの店員は先日の「花壇展覧会」は見なかったから知らないという。いろいろ問答をしてそこに出陳されている切り花を点検した結果、たぶんそれはローヤル・スカーレットと称する品種であるらしいというところまでは

やっとこぎつけることができた。

こんな些細な知識を求めらるるのでも容易なことではない。いやむしろ些細なことだからむづかしいかもしれぬ。

学問のほうでも当世流行の問題に関する知識を求めよとすると場合は参考書でも論文でも有り過ぎて困る。しかしそういう本や論文を読んだだけで、自分の疑問のすべてを解かれるためしはほとんどない。くすぐったいところになると、どの本を見てもやっぱり、くすぐったい。わかりきったことは、どの本を見ても明瞭である。

実験的研究に関する書物や論文を読んでも記載を読んだだけで、そのとおりやってもできないことはよくある。肝心の要訣ようけつがぼかしてある場合が多いのは著者の故意か不親切かひとり合点かわからない。芸術家も同様に科学者も自分のしていることの妙所を認識できないためかもしれない。

結局自分に入用なものは、品物でも知識でも、自分で骨折って掘り出すよりほかに道はない。本屋にあまりたくさんいろいろな本があるので、ついついだまされて本さえ見れば学者になれるというような錯覚にとらわれる

のである。

四 錯覚利用術

これも目のたよりにならぬ話である。

急に暑くなった日に電車に乗って行くうちに頭がぼろぼろとして、今どこを通っているかという自覚もなくぼろぼろやり窓外をながめていると、とあるビルディングの高い壁面に、たぶん夜の照明のためと思われる大きな片かなのサインが「ジンジンホー」と読まれた。どういいうわけ

か、その瞬間に、これは何か新しい清涼飲料の広告であろうという気がした。しかしその次の瞬間に電車は進んで、私は丸の内「時事新報」社の前を通っている私を発見したのであった。

宅うちに近い盛り場にあるある店の看板は、人がよく「ボ
ンラクサ」と読んでなんのことだろうと思うそうである。
丸の内の「グンデルビ上海」の類である。東海道を居眠
りして来た乗客が品川で目をさまして「ははあ、はがな
しという駅が新設になったのかなあ」と言ったのも同様
である。

反対に、間違っただのを正しく読むのは校正の場合の敵である。これを利用して似寄った名前の偽似商品を売るのもある。

たとえばゴルフの大家梅本鶴吉という人があるとする。そうして書店の陳列棚に「ゴルフの要訣^{ようけつ}、梅本鶴吉著」という本があったとすると、十人が九人まで「本」を「木」と読んでその本を買って来るであろう。そうしてその九人のうち四人か五人まではおしまいまで、その間違いに気づかずにしてしまうかもしれない。書いてある事に間違いがなければ、苦情の言いようはない。

こういう間違いの心理のもう少し複雑なものを巧みに利用したと思われるのが新聞記事の中で時々見つかる。

たとえば、ある学者が一株の椿つばきの花の日に落ちる数を記録して、その数の日々の変化異同の統計的型式を調べ、それが群起地震の日々あるいは月々の頻度の変化異同の統計的型式と抽象的形式的に類型的であるという論文を公表したとする。そのような、ほんのちよつとした論文の内容がどうかすると新聞ではたいした「世界的」な研究になったり、ラジオでまで放送されて、当の学者は陰で冷や汗を流すのである。この新聞記事を読んだ人

は相当な人でも、あたかも「椿の花の落ち方を見て地震の予知ができる」と書いてあるかのような錯覚を起す。そうして学者側の読者は「とんでもなく吹いたものだ」と言っただけで笑うかおこるかである。ところでその記事をよくよく読んでみるとちっとも、そんなうそは書いてないのである。ともかくもその論文の要点はそんなにひどく歪曲わいきよくされずに書いてある。それなのに、活字の大小の使い分けや、文章の巧妙なる陰影の魔力によって読者読後の感じは、どうにも、書いてある事実とはちがったものになるのである。実に驚くべき芸術である。こういうのが

いわゆるジャーナリズムの真髄とでもいうのである。

ついこのあいだもある学者がアメリカの学会へ行つて「こうかい黄海の水を日本海へ注入して電力を起こす」という設計を提出して世界の学者を驚かせたという記事が出た。

数日後に電車でひょっくりその学者に会つて「君はアメリカに行っているはずじゃないですか」と聞いたら、そうではなくて、ただ論文を送つただけで、それをだれかが代読したのだそうである。題目は朝鮮の河川の流域變更に関するものだそうである。なるほど、新聞記事のどこにも、当人自身がその論文をよんだとはつきり書いて

はなかつたかもしれない。河川の流域を変ずれば、なるほど黄海に落ちるはずの水を日本海に入れる事も可能である。しかし、新聞記事の多数の読者には、どうしても、当人が登壇して滔々とうとうと論じたかのごとく、また黄河の水を大きなバケツか何かで、どんどん日本海へくみ込むかと思わせるようになっているのである。そのほうがなるほどたしかにおもしろいには相違ないのである。一種の芸術としては実に感嘆すべきものであるが、犠牲になる学者の難儀もまた少々ではないのである。

この術は決して新しいものではなくて、古い古い昔か

ら、時には偉大なる王者や聖賢により、時にはさらにより多く奸臣かんしんの扇動者によって利用されて来たものである。前者の場合には世道人心を善導し、後者の場合には惨禍と擾乱じょうらんを巻き起こした例がはなはだ多いようである。いずれもとにかく人間の錯覚を利用するものである。

もしも人間の「目」が少しも錯覚のないものであったら、ヒトラーもレーニンもただの人間であり、A—A事件もB—B事件も起こらず、三原山もにぎわわず、婦人雑誌は特種を失い、学問の自由などという言葉も雲消霧散するのではないかという気がする。しかしそうなって

ははなはだ困る人ができてくるかもしれない。「錯覚」を食って生活している人がどのくらいあるかちよつと見当がつかないのである。また錯覚からよびさまされて喜ぶ人はほとんどまれである。尊崇している偉人や大家がたちまちにして凡人以下になつたりするのではだれでも不愉快である。大概の錯覚は永久にだいにそつとしておくほうがいいかもしれない。ただ事がらが自然科学の事実に関する限り、それを新聞社会欄の記事として錯覚的興味をそそることだけは遠慮なくやめたほうがいいであらうと思う。何人をも益するなんびとことなくして、ただ日本

の新聞というものの価値をおとすだけだからである。

五 紙獅子

銀座や新宿の夜店で、薄紙をはり合わせて作った角張ったお獅子ししを、卓上のセルロイド製スクリーンの前に置き、少しはなれた所から団扇うちわで風を送って乱舞させる、という、そういう玩具おもちゃを売っているのである。これは物理的にもなかなかおもしろいものである。ヨーヨーも物理的玩具がんぐであるが、あれはだいたいは簡単な剛体力学の

原理ですべてが解釈される。しかしこの獅子のほうは複雑な渦流かりゅうが複雑な面に及ぼす力の問題を包んでいる。飛行機と突風との関係に似ていつそう複雑な場合であるから、世界じゅうの航空力学の大家でも手こずらせるだけの難題を提供するかもしれない。

このおもちゃは、たしかに二十年も前にやはり夜店で見たことがあるから、かなり昔からあるかもしれない。もしこれが日本人の発明だとしたらたしかに自慢のできるものである。事によるとシナから来たかもしれない。玩具がんぐ研究家の示教を得れば幸いである。

こんな巧妙なものでも、時代に合わず、西洋からはや
つてこない限りたいていして商売にはならないらしい。

二十年前に見た時に感心したのは売り手のじいさんの
団扇うちわの使い方の巧妙なことであった。団扇の微妙な動か
し方一つでおどけた四角の紙の獅子ししが、ありとあら
ゆる、「いわゆる獅子」の姿態をして見せる。つくづく
見ていると、この紙片に魂がはいつて、ほんとうに二匹
の獅子が遊び戯れ相角逐あいかくちくしまた跳躍しているような幻覚
をひき起こさせた。真に入神の技であると思つて、深い
印象を刻みつけられたことであつた。あやつり人形の糸

の代わりに空気の渦を使っているのだから驚く価値があるのである。これもやはり錯覚を利用する芸術である。

それが、昭和八年の夜店に現われたところを見ると、昔の紙の障子はセルロイドの円筒形スクリーンに変わっている。売り手のよごれた苦にがいじいさんは、洋服姿のモダンボーイに変わっている。しかし団扇の使い方に見られたあの入神のヴァーチユオシテイ妙技はもう見られない。獅子はタバタとチャールストンを踊るだけである。なるほどのほうがほがらかで現代的で見るのに骨が折れない。一目見れば満足して次の店に移って行かれる。忙しい世の

中に適している。

大正から昭和へかけての妙技無用主義、ジャズ・レビユー時代がどれだけ続いて、その後にもた少し落ち着いてゆっくり深く深く掘り下げて洗練を経たものが喜ばれ尊重される時代が来るか、天文学者が遊星の運動を観測しているような、気長い気持ちで見ているのもまた興味のないことではない。

(昭和八年八月、中央公論)

日本文学電子図書館

錯覚数題

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第四卷
岩波文庫、岩波書店

昭和41年7月10日 第24刷発行



日本文学電子図書館